加盟館統計による医学図書館評価の試み

Preliminary Survey of Medical Libraries in Japan

木下 順一* 土屋 久子 光 斎 重 治**

大阪市立大学附属図書館医学部分館

I. はじめに

図書館を計量的に把握し、評価しようとする試みは、従来いろいろな面でなされてきた。かつては、その基準が図書館の大きさ、即ち物理的な建築面積であり、蔵書量の絶対数であった。

近年、公共図書館をはじめとして、利用の拡大が叫ばれ、貸出の増加が図られた。その結果、図書館の活動を示す一つの尺度として、貸出冊数が用いられ、その蔵書に対する比率として、回転率が論じられるようになった。

しかし、膨大な蔵書量を誇る大学図書館において、貸出冊数を蔵書数で除した回転率や、コピーをも含めた館内利用が多数考えられる雑誌等の資料の貸出冊数の比較では、本当の意味の図書館活動の計量的把握にはならないと考えられる。特に情報化時代における最近の相互利用の発展からは、他館に対する Document delivery も図書館活動の大きな要素を占めており、まして日本医学図書館協会に加盟する医学図書館のように、資源共有の理念のもとに、互惠互助の精神で広く学外の利用者にもサービスを提供することを建て前とする図書館においては、これらの数字も無視することはできない。

今回報告する評価の試みは、森耕一氏が公共図書館の評価に用いた手法¹⁾にヒントを得たものであり、毎年協会が発行する「加盟館統計」から得られる数字を

加工し、比較することにより、図書館サービスの評価を計量的に探ろうとするものである。

数字は総て、「第57次日本医学図書館協会加盟館統計昭和60年4月～61年3月」のものをい用い、対象は大学図書館（88館）に限定した。

このような「加盟館統計」を用いた分析には今までに星馬²⁾や河田³⁾のものがあり、医学図書館の統計に関しては、さきの河田のものを含めた特集⁴⁾も組まれているが、今回は基本的な諸元との比較等による図書館の評価を試みたものである。

II. 評価項目の設定と数値

図書館活動を測定できるものとして、加盟館統計から得られる数字から、基本的項目として、面積・開館時間・年間増加冊数・受入雑誌数・資料費・館員数を選び、利用に係わる項目として、貸出冊数・複写件数・相互利用（貸）件数を選定した。

項目として扱う数値は、下記のようにして求めた。

- ・面 積：分館・分室を含む
- ・開館時間：1 週間の平均開館時間×年間開館日数
- ・年間増加冊数：図書館受入分のみ（教室受入分を含まず）
- ・受入雑誌数：図書館受入分のみ（教室受入分を含まず）
- ・資料費：図書館分のみ（単行書・雑誌以外の資料費は除外）
- ・館 員：専任職員の設定員内・定員外の合計
- ・貸出冊数：報告のまま
- ・複写件数：枚数で報告している館については1件8枚で算出

* Jun'ichi KINOSHITA: Medical Library, Osaka City University, 1-4-54 Asahi-machi, Abeno-ku, Osaka 545, Japan.

** 現 中部大学附属三浦記念図書館

(平成元年3月17日 受理)

表 1. 基本的項目の絶対数によるベスト10

順位	面 積		開 館 時 間		年間増加冊数		受 入 雑 誌		資 料 費		館 員		利用対象者	
	館名	(㎡)	館名	(時間)	館名	(冊)	館名	(誌)	館名	(千円)	館名	(人)	館名	(人)
1	埼玉	6,906	筑波	3,564	阪大	11,195	阪大	5,859	阪大	173,877	慶応	27	昭和	7,115
2	独協	5,829	山口	3,540	東海	9,963	日大	3,030	慶応	129,144	日医	23	慈恵	5,891
3	九大	5,754	熊本	3,455	朝日	9,256	慶応	2,801	福岡	122,317	鶴歯	21	東女	5,310
4	東大	5,226	香川	3,402	帝京	8,810	九大	2,601	東北	112,395	東北	19	日医	4,901
5	岩手	4,859	阪大	3,320	金医	8,487	岩手	2,323	帝京	108,241	阪大	18	阪大	4,792
6	東北	4,025	岡山	3,316	日医	7,758	金沢	2,245	東海	104,620	札幌	18	東北	4,724
7	阪大	4,013	慈恵	3,311	岩手	7,190	東北	2,118	日大	102,661	九大	18	九大	4,597
8	自治	3,828	北里	3,309	日大	6,649	昭和	2,604	日松歯	100,555	埼玉	18	藤田	4,547
9	日医	3,724	信州	3,303	筑波	6,575	日医	2,008	岩手	94,154	帝京	17	関西	4,517
10	医歯	3,639	慶応	3,292	日松歯	6,339	北里	1,973	昭和	88,534	東女	17	医歯	4,425
平均	—	2,218	—	2,854	—	4,003	—	1,383	—	53,830	—	11	—	2,887
阪市	66位	1,509	79位	2,310	54位	2,925	58位	1,030	68位	31,397	80位	5	52位	2,410

表 2. 利用に係わる項目の絶対数によるベスト10

順位	貸 出		複 写		相 互 貸 借	
	館名	(冊)	館名	(件)	館名	(件)
1	東大	70,656	筑波	106,760	阪大	262,773
2	日大	68,355	阪大	100,092	東大	164,400
3	京都	66,373	日医	85,380	札幌	35,132
4	阪大	60,956	自治	84,131	兵庫	34,585
5	慶応	60,392	東邦	77,795	神戸	30,983
6	徳島	54,141	防医	64,623	慈恵	23,731
7	岩手	50,077	秋田	61,704	独協	22,780
8	東女	47,909	順天	59,875	東北	21,085
9	山口	46,573	慶応	56,450	東医	21,051
10	九大	42,874	富山	56,188	阪市	20,329
平均	—	21,355	—	24,015	—	11,011
阪市	52位	15,214	74位	3,991	—	—

・相互利用(貸)件数：謝絶を含む受付件数

各項目における数値のベスト10は表 1、表 2 のとおりとなった。「表」中における館名は日本医学図書館協会加盟館統計による。

Ⅲ. 各項目の算定法と評価法

各項目の絶対数のみの比較であれば、大学規模など

によって左右され、正確な評価は得られにくいので、各項目をサービス対象人員数で除した利用者 1 人当たりの数値を算定してみた。利用に関する項目で「相互利用(貸)」件数については、自館の利用者 1 人当たりの数は意味を持たないので、館員 1 人当たり、どれだけの受付件数を処理したかを算定して比較することにした。また、「サービス対象人員」で「館員」を除した利用者 1 人当たり何人の館員がサービスに当たっているかの数値をもつけ加えた。

各項目の対象利用者におけるベスト10を表 3、表 4 にまとめた。

各表のそれぞれの項目で算定された生の数値で評価することは、項目間の比較や「基本的項目」「利用に関わる項目」等のグルーピングに数字が細かすぎて不便な点がある。

そこでさらに、各項目の平均値を求め、それぞれの平均値より20%以上高いものを「5」、10%以上20%未満を「4」、平均値周辺を「3」、平均値より10%以下20%未満低いものを「2」、平均値20%以下のものを「1」として、各館の項目ごとに評価点を与え、それで一応の評価を試みることにした。

館の記号は M (医科系) と D (歯科系) に大別し、表に現れた順に適当に番号を付した。各表間の番号は共通である。特定の館がどの番号に相当する

表 3. 基本的項目の対利用者数によるベスト10

順位	面 積		開 館 時 間		年間増加冊数		受 入 雑 誌		資 料 費		館 員	
	館名	㎡／利用者	館名	時間／利用者	館名	冊／利用者	館名	誌／利用者	館名	千円／利用者	館名	人／利用者
1	D 1	2.07	D 6	2.48	D 1	4.63	M14	1.22	D 9	62.2	D 7	0.0147
2	M 1	1.81	M 6	2.21	D 8	4.20	D 7	1.17	M18	56.6	D 1	0.0086
3	M 2	1.61	M 7	2.00	D 9	3.92	M15	1.02	D13	53.2	M15	0.0078
4	M 3	1.61	M 8	1.93	M11	3.89	D 3	0.96	D 1	49.8	M17	0.0076
5	D 2	1.55	D 5	1.90	D 7	3.49	D 1	0.88	D 7	48.9	D 3	0.0069
6	D 3	1.51	M 9	1.82	M 3	3.30	D13	0.87	M11	40.9	M 9	0.0066
7	M 4	1.49	M10	1.79	M12	3.11	M 5	0.86	D 3	40.8	D 5	0.0066
8	M 5	1.42	D 1	1.78	D 6	2.98	M16	0.86	D14	40.2	M 8	0.0063
9	D 4	1.33	D 3	1.77	M13	2.86	D 9	0.79	M14	36.3	M18	0.0062
10	D 5	1.30	D 7	1.76	D13	2.86	M17	0.79	M17	36.2	M19	0.0061
平均	—	0.82	—	1.14	—	1.54	—	0.51	—	20.5	—	0.0041
阪市	59位	0.63	49位	0.96	50位	1.21	51位	0.43	61位	13.0	80位	0.0021

表 4. 利用に係わる項目の対利用者数によるベスト10

順位	貸 出 冊 数		複 写 件 数		相 互 利 用	
	館名	冊／利用者	館名	件／利用者	館名	件／利用者
1	M21	21.9	M13	46.4	M14	14598.5
2	M22	20.0	M 7	38.1	M23	11742.9
3	M23	17.0	M 3	34.0	阪市	4065.8
4	M24	16.9	M 4	32.7	M32	3144.1
5	M17	16.9	M28	25.5	M26	2383.3
6	M13	15.8	M29	21.8	M18	1951.8
7	M25	15.1	M30	20.9	M33	1816.8
8	M26	14.4	M14	20.9	M 1	1752.3
9	M18	13.4	M16	19.8	M34	1695.1
10	M27	12.7	M31	19.1	M35	1540.1
平均	—	7.5	—	8.7	—	864.0
阪市	49位	6.3	75位	1.7	3 位	4065.8

かは、好評価により実名を用いた館以外、読者の想像に任せる。

IV. 評 価

表 3, 表 4 におけるベスト10に顔を出す館はすべて評価点は「5」であった。

これを項目ごとに分析してみた。

1. 各項目における評価

面 積：歯科系大学がベスト10の半数を占め、残り10館は新設医科大学であった。新設の医科大学は日本医学図書館協会（以下、協会とする）加盟の新しい大学ということで、協会の加盟基準をクリアするために努力した結果であろう。

開館時間：面積と同じく歯科系大学が半数を、そして国立の新設医科大学が残り半分を占めた。国立の新設医科大学のこのような状況は文部省の指導が十分行き届き、超過勤務手当等の予算化が行われ、保障されているためであろうか。

年間増加冊数：この項目においても歯科系大学が半数以上を占めている。上位10館の学生1人当たりの平均増加冊数は3.5冊であった。1位の北歯（D 1）は全平均増加冊数の3倍もあり、目を見張るものである。

受入雑誌：やはり外国雑誌センター館である阪大（M14）がトップであるが、この項目においても歯科系大学が半数を占めている。いろいろな面で充実が遅れている公立大学の中で福島（M15）がここで3位であることは注目に値するものであろう。

資料費：ここでも歯科系大学の図書館に対する積極さと、経済的な余裕が窺える。一方、福岡（M18）・東海（M19）・慶応（M17）の私学の図書館と、外国雑誌センター館の阪大（M14）が健闘しているとい

えよう。

館 員：上位10館の図書館員1人当たりの利用対象者の平均は137.7人で、全加盟館平均の約半分で当館とは3.5倍の違いがある。この項目にあっても歯科系大学が上位にいますが、島根（M9）・滋賀（M8）・旭川（M19）といった国立の新設医科大学が健闘している。このことは、比較の利用対象（教職員・学生）が少ないにもかかわらず、一定数の職員が確保されている国立の余裕を見る思いがする。また、開館時間と同様、国（文部省）の図書館に対する積極的な政策のあらわれであろうか。

貸出冊数：基礎的項目と打って代わって、歯科系大学がベスト10に進出することがなく、医科系図書館で占められている。

複写件数：複写は貸出と相関関係にあると考えられ、同等のウェイトを持っているといえよう。歴史の新しい図書館が台頭している。

相互利用：阪大（M14）と東大（M23）が群を抜き、1・2位を占めている。これは、外国雑誌センター館として、或いは歴史ある図書館としての務めからこのような結果が生まれたのであろう。また、歯科系の進出が見られないのは、所蔵資料の違いが大きく左右しているからであろうか。

以上、基本的項目、利用に係わる項目のそれぞれに

ついて見てきたが、まとめてみると、基本的な項目の得点（満点30点）のベスト10は、表5のようになり、利用に関する項目（満点15点）では表6となって、富山（M28）を除いては内容が一変する。基本的項目で満点となったものはすべて歯科大学の図書館であり、他にも高い得点の館が2館あって、全体の比率からいっても、この項目における歯科系大学図書館の充実が目立っている。歯科大学図書館は協会加盟が比較的新しく、協会の加盟基準をクリアし、古い館に追いつけ追い越せと、資料をも含めた設備面に相当の投資を行っている事がうかがえる。また、医科系に比べて、看護専門学校や、医療技術短大等を持たないところが多く、分母となる利用者数が少ないため、1人当たりの数字を良くしているのかもしれない。それにしても、新設医大の富山（M28）と公立の福島（M15）の健闘は光っている。しかし、目を利用に関する項目に転じると、上位15館（同得点のところがあるので、8位タイまで15館となる）の内から表5におけるベスト10は、富山（M28）以外総て姿を消してしまう。このことは、基本的項目に当たる部分に力を入れることは大切ではあるが、それだけでは利用者（協同体に属する他館の利用者をも含めて）を十分満足させることはできないということを物語っているように思われる。以上の結果をレーダーチャートにしてみると、図1と図2のようになる。

表5. 基本項目評価点

順位	館名	評価
1	D 1	30
1	D 3	30
1	D 7	30
4	M 3	27
5	M28	26
5	M18	26
5	D 5	26
8	M15	25
8	M 5	25
8	D 9	25
70	阪市	13

表6. 利用項目評価点

順位	館名	合計
1	M 17	15
1	M 14	15
3	M 28	13
4	M 27	12
4	M 13	12
4	M 16	12
4	M 35	12
8	M 36	11
8	M 24	11
8	M 23	11
8	M 36	11
8	M 34	11
8	M 29	11
8	M 22	11
8	M 26	11
23	阪市	9

表7. 総 合 評 価

順位	館名	基礎	利用	総計
1	M28	26	13	39
2	D 1	30	8	38
2	M17	23	15	38
2	M14	23	15	38
5	D 3	30	7	37
5	D 7	30	7	37
7	M 5	25	11	36
8	M18	26	9	35
8	M 3	27	8	35
10	M 4	24	9	33
68	阪市	13	9	22

図1. 総合評価

図2. 総合評価

図1は、基本的項目のトップ3館の点数を表したものでその片寄り具合が一目瞭然である。

図2は、利用に係わる項目のトップ3館と当館とを比較したものである。富山(M28)が比較的安定した型をしており、総合評価(表7)で1位となることもうなずけるところである。慶応(M17)、阪大(M14)も部分的に落ち込むところもあるが、さすがに全体としてはほぼ安定している。

ところが当館は非常にアンバランス型をしており、是正すべき点が多々みられる。小さな数字なりに安定(円に近い)していた方がよいのか、ひとつでも突出している点を評価すべきなのか、判断に苦しむところである。

利用に関する項目の得点には、相互利用の点数が大きくひびいているようであり、相互利用にむいている資料の所蔵が少ないと思われる歯科系の点数が低くなると、歯科系の図書館にとっては不利な評価とはなるが、客観的にみても、ここではさすがと思われる館が多く浮び上がっており、あながち乱暴な評価ではないように思われる。

V. おわりに

図書館活動の計量的把握による評価は大変難しく、参考業務等における質的評価に及ぼすことはできないし、また、ここに選定した9項目だけで総てを判断することは危険である。しかし質的判断の基準がなく、量的な判断にしても、絶対数の比較だけでは正確な評価につながらないと考え、今回、以上のような試みをしてみた。

現在のところまだ確実なことをいえる段階ではないが、図書館は利用されてはじめてその価値を発揮するのはいうまでもないことなので、やはり利用に関する項目において、高い評点を得る必要がある。今回は平均点をベースにした相対評価であるが、将来何等かの

科学的根拠が得られるならば、それをもとにした絶対評価を試みたいと思っている。

また、基本的項目の充実が、直接利用に結びついていない点は極めて残念であるが、さりとてこれらの諸点をおろそかにすることはできない。何故なら、これらの点がおろそかにされているところは、更に悪い結果を生むことが予測されるからである。今ひとついえることは、相互協力に熱心なところは館内利用も高く、総体的に高い評価が得られていることである。日本医学図書館協会の理念と伝統が息づいているところであろうか。

最後に統計数字の提出に際して、求められている数字が何であるかを十分把握する必要があるように思われる。提出される数字が不明瞭であれば、正確な分析はできないし、あやまった結論を導く恐れがある。

今後機会があれば、更に詳しい分析と評価を行い、外国との比較なども試みて、我が国の医学図書館の標準値を探りたいと思っている。

なお、この研究には昭和62年度の協会の研究助成を受けた。記して感謝の意を表したい。

参考文献

- 1) 森 耕一 図書館評価の一試案. 図書館雑誌 1986; 80(8): 476-8.
- 2) 昼馬逸郎 加盟館統計からみた国立大学医学図書館の実態側面. 医学図書館 1980; 27(2): 73-81.
- 3) 河田政雄 統計からみた日本の医学図書館における運営形態のパターン — 昭和40年日本医学図書館協会加盟館統計から —. 医学図書館 1967; 14(3): 273-97.
- 4) 北川敏男他 特集: 医学図書館統計. 医学図書館 1967; 14(3): 189-272.